

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 旧石器時代の野中第 1 遺跡について

今回の旧石器時代の遺構、遺物は A 区で確認された。グリッド C 8 で確認された礫群は小林軽石火山灰を含む基本層序Ⅶa層内で検出だったことから、相当期の構築と考えられる。遺物は A 区中央部のⅦb層、Ⅷa層、Ⅷb層で、石器が剥片まで含め合計で323点、比熱した礫が875点出土している。組成は小型のナイフ形石器、剥片尖頭器、スクレイパー、使用痕のある剥片、敲石で、第Ⅱ章で述べたように石器群が出土した地点は斜面で土壌の堆積が安定しておらず、出土層位での分類が困難であったが、ATの風成層以上で出土していることから宮崎10段階編年の第4段階に位置づけられる資料と考えられる。

第 2 節 縄文時代の野中第 1 遺跡について

今回縄文時代と認められた遺構、遺物はアカホヤ火山灰以下のⅥ層内で出土した遺物とⅦ層上面で検出した集石遺構12基である。遺物は草創期の隆帯文土器の一群と早期の水迫式土器、押型文土器、塞ノ神式土器と長期に渡って出土しているものの、その出土は少量であった。37、38が3号集石遺構内で出土し、7号集石遺構の周囲で39、40、50以外は、土器類と集石遺構の関連を認めることができなかった。これら集石遺構は3号、7号集石遺構を出現期とし、少量ながらも包含層から出土した早期後様の塞ノ神式土器までの期間に、単発的に幾度も集石遺構を構築した状況と考えられ、平坦面が発達していない丘陵上では長期間に渡る滞在には適していなかったと思われる。

第 3 節 アカホヤ火山灰降灰以後の野中第 1 遺跡について

アカホヤ火山灰降灰以降の文化層は2面で確認された。下面はアカホヤ火山灰層上面を検出面とする土坑群である。いずれも A 区の南側で確認されている。遺構内から出土した遺物は52のみであるが、上層のⅢ層包含層の遺物を含め、弥生から古墳時代前期までの期間の土坑群と判断したい。11～13号土坑は1.5～1.7mの深さを持ち、断面形はキャリパー型で壁の途中から大きく開く特徴を持つ。縄文時代にある陥し穴の形状に近く、相当期の類例の可能性が考えられる。

上面の文化層はⅢ層上面を検出面とする遺構の一群である。A 区と B 区での土坑5基と溝状遺構（道路跡）2条が確認されている。いずれの遺構内の埋土にもTh-Sを含んでおり、それ以前の構築が考えられる。1号、5号、19号土坑では遺構底面付近から大量の炭化木が出土しており、木材を燃焼していたと考えられる。炭化木は1号土坑では樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属と同定され、復元形は約5cmと小径の材であったとしており、放射性炭素年代測定ではAD1220～1285年の結果が得られている。類例としてカシ類の樹種は鍛冶をおこなう際の小炭として古来より用いられている。今回の結果が小炭生産のための類例とするには飛躍しすぎた推測かもしれないが、5号土坑では炭化材を外に掻き出したように底面から壁面の一部に偏って出土している。この状況は、これらの炭化木が単に燃料として用いられただけでなく、発生した炭化木（炭化材）そのものを製品として持ち出した結果とも考えられる。